認知症カフェの継続に向けて

コロナ禍でもつながりを維持するために

このパンフレットについて

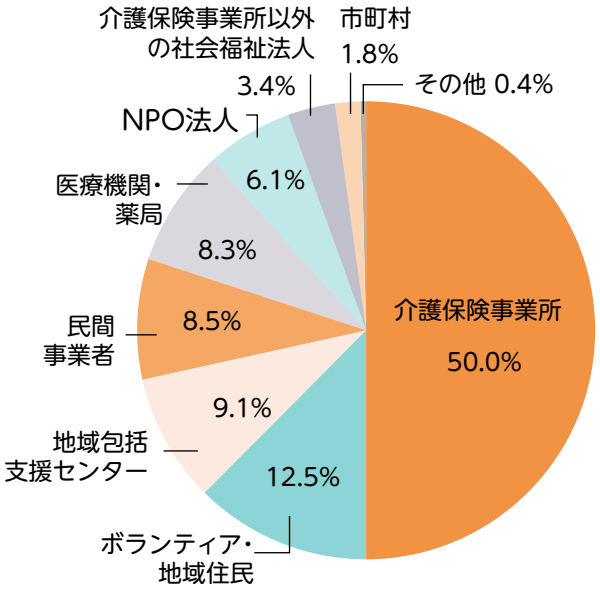
認知症カフェは、認知症の人や家族、地域の人々、専門職が、フラットな関係で交流することのできる場です。運営者の思いや参加者のニーズに応じた運営がなされており、多様な主体により、実施方法や場所、頻度、参加者、プログラムなど、様々な特徴をもった認知症カフェが県内約500か所で開設されています。こうした場やそこで生まれる交流は、認知症の人や家族が住み慣れた地域で暮らし続けるためのかけがえのない資源といえます。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、私たちの生活は一変しました。多くの認知症カフェでは、感染に対する不安から活動の休止や縮小を余儀なくされており、これまでに築かれた関係やつながりが途切れてしまうことが懸念されています。

コロナ禍をはじめ、今後も災害や別の感染症等により、様々な制約が生じることは想定されます。そのような状況においても、認知症カフェにおける「つながり」を維持し、取組を絶やさないようにするためには、どのような工夫が必要でしょうか。

このパンフレットは、コロナ禍における様々な工夫や取組を紹介することで、認知症カフェを運営する方、支援する方、参加される方にとって、今後のヒントとなることを願い作成しました。

開設主体の構成（2021年6月末）



※県内市町村が把握している認知症カフェ（n=506）

パンフレットの活用イメージ

認知症カフェ運営者	▶実践例を参考にしながら、継続に向けてそれぞれのカフェでできることを考えてみる
市町村や地域包括支援センター等	▶コロナ禍での認知症カフェの現状を知り、支援に活かす ▶取組事例等について身近なカフェに情報提供する
認知症の人・家族等	▶継続方法について、参加するカフェで話し合ってみる ▶新たに認知症カフェに参加してみる

コロナ禍の認知症カフェの状況は？

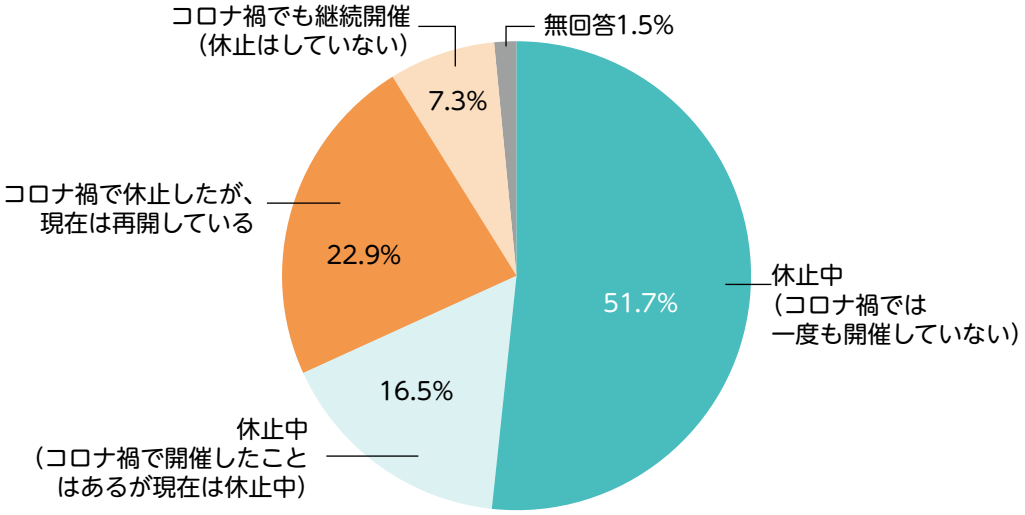
愛知県では、2021年８月に県内の市町村や認知症カフェを対象として、コロナ禍における認知症カフェの開催状況等についてアンケート調査を実施しました。

Q. 運営状況は？

A. 多くのカフェがコロナ禍で休止しています

2021年８月時点では、約７割の認知症カフェが休止中でした。一方で、一旦休止をした後に、再開しているカフェがあります。

認知症カフェの開催状況（2021年８月時点）



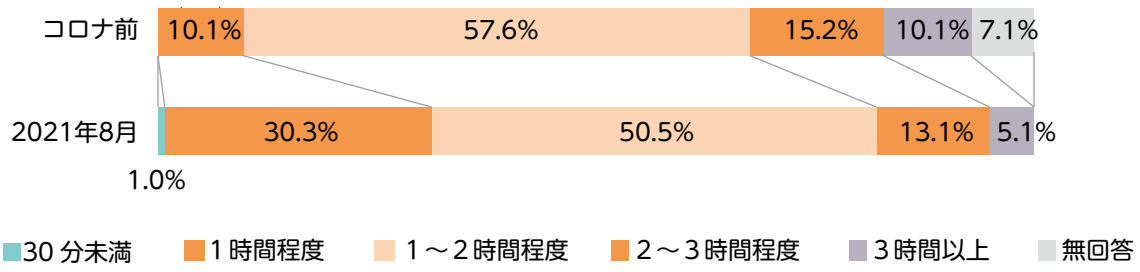
※アンケート回答のあった認知症カフェ（n=327）

Q. 開催方法に変化はあった？

A. 短時間での開催が増えています

コロナ前後で１回あたりの開催時間を比べると、「１時間程度」での実施が増えており、以前よりも短時間にして継続しているカフェが多くなっています。

１回あたりの開催時間（コロナ前後）



※「コロナ禍で休止したが現在は再開している」「コロナ禍でも継続開催」と回答したカフェ（n=99）

Q. 参加者数は？

A. 参加者が減少しています

コロナ前後の１回あたりの平均参加者数を比べると、認知症の人や家族の参加が減少しています。

感染防止のため、参加を見送っている方が一定数いることが推測されます。

１回あたりの平均参加者数（コロナ前後）

	コロナ前	2021年８月
認知症の人（高齢者）	3.40人	2.68人
認知症の人の家族	2.50人	1.88人

※「コロナ禍で休止したが現在は再開している」「コロナ禍でも継続開催」と回答したカフェ（n=99）

Q. 活動休止・縮小による影響は？

A. 認知症の人や家族に影響が出ています

認知症カフェの休止によって、認知症の人や家族に影響があったという声があがっています。

アンケート回答より

出かける機会が減り、気力・体力が低下し、笑顔が少なくなったように感じました。

参加者の方で、うつや幻聴等の症状が悪化された方がいました。

家族と家で過ごす時間が増えたことで、衝突することが増えたと聞きました。

再開時に、「気持ちを話せる人が近くにおらず、ストレスをためていた。」と話される方がいました。

Q. つながりを維持するための工夫は？

A. 手紙や電話で連絡を取ったり、オンラインで開催しているカフェがあります

参加者が集まって開催するだけでなく、参加者へ手紙を送付したり、定期的な電話連絡をするなどして、つながりを維持しているカフェがあります。また、少数ですが、オンラインツールを活用しているカフェも出てきています。

アンケート回答より

参加時に気になった方には電話連絡をし、可能であれば訪問しました。

カフェ便りを送り、近況等を返信いただけるような工夫をしています。

休止中は、自宅でできる体操などを紹介したメールを配信していました。

オンラインツールが使用できる方には自宅から参加してもらい、ハイブリッド形式で開催してみました。

認知症カフェの意義　～本人・家族・運営者の声から～

認知症の人・家族の声

以前は外出がスーパーでの買い物くらいしかありませんでした。認知症カフェのような交流の場は居場所として大切だと思います。

認知症カフェに行くのは、同じ認知症の人が集まっているからかもしれないです。認知症のことを気にしたり、わざわざ話をしなくても、安心して行くことができます。

とにかく話をしたい、どうしていいか分からないときなど、カフェに行くと、同じ立場の人に会うことができ、日々の経験や悩みを共有することができます。

ここに行けば誰かと話をできる場として、オープンになっているところがあるのはありがたいです。認知症カフェでは、一緒に行った人以外の人とも話ができて、多様な交流の場になっています。

相づちを打つ程度のこともありますが、本人のペースで話をしています。少しずつ、話をできることを楽しめるようになってきていると感じます。

信頼できる人と出会い、話を聞いたり教えてくれる人がいると思えると、安心感につながり、少しずつ「何とかなるかな」と思えるようになってきました。

認知症カフェ運営者の声

休止の連絡をすると、参加者から「楽しみにしている、早く再開してほしい」、「行くところがなくてつまらない」との声を多くいただきました。皆さんの日常生活の中で必要な場所と時間になっていることを強く感じました。

カフェを再開した際、参加者から「久しぶりに笑った」などの声を多くいただきました。人と人のつながりや交流の大切さを改めて感じる機会となりました。

定期的に互いに変わらない姿を確認し合えることは、とても良い機会だったと再認識しています。認知症というキーワードで、地域の方々のつながりが生まれ、広がっていくことは大切なことだと思います。

認知症カフェは、スタッフが場所や時間、目的を共有し、協力できる場です。運営に関わるボランティアさんにとっても、集まることが楽しみになっていることを再認識しました。

コロナ禍での「つながり」の維持に向けて

コロナ禍で多くの認知症カフェが休止や縮小などの対応を余儀なくされています。また、それによって参加されている認知症の人や家族にも様々な影響が指摘されています。

同時に、従来のように参加することが叶わない状況を経験したことで、これまで以上にカフェの大切さを実感した参加者の方も多いのではないでしょうか。また、参加者からの再開を望む声を受け、これまで続けてきた取組の意味を改めて認識された運営者の方もいるかもしれません。

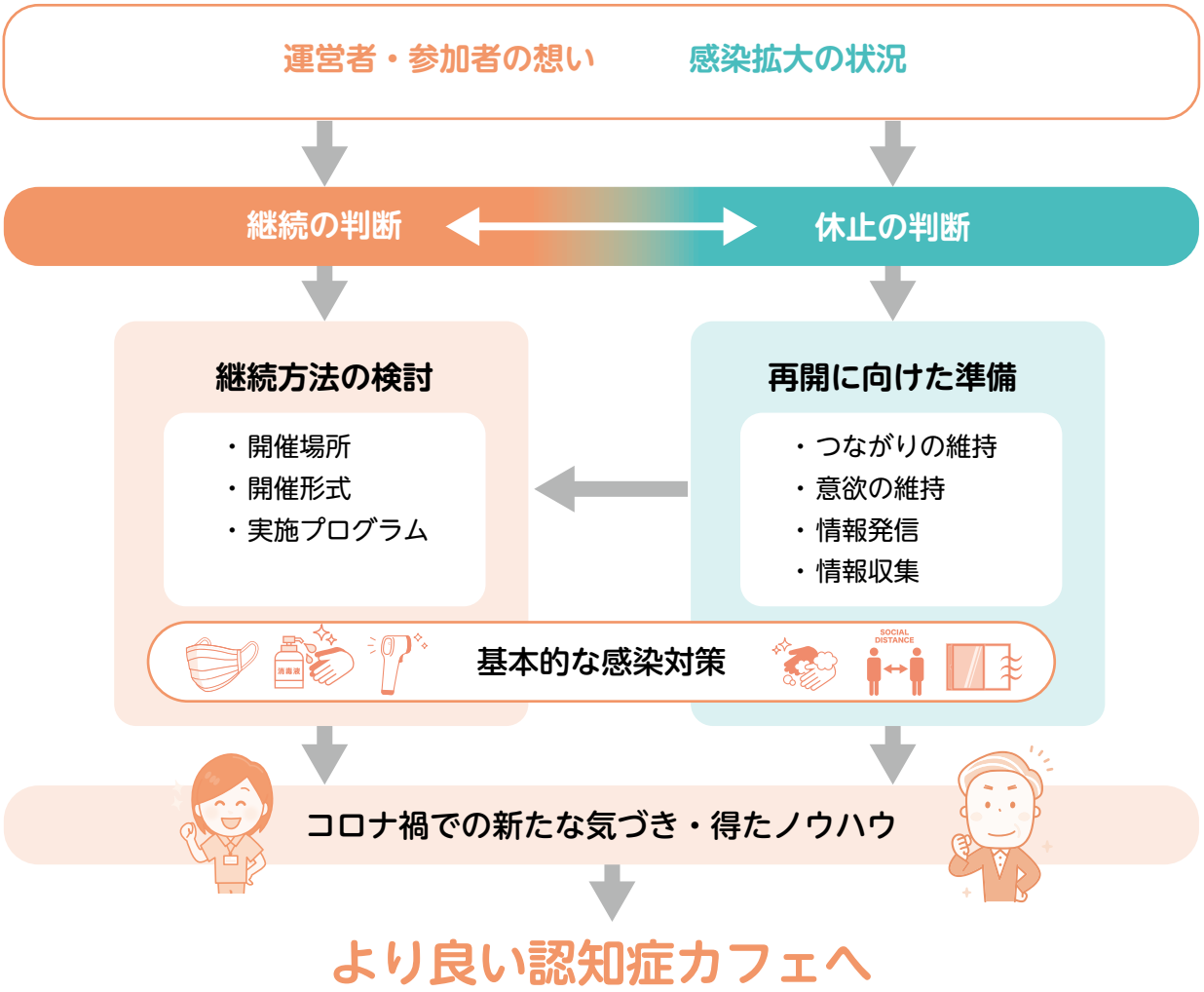
本来であれば、これまでのようにみんなが顔を合わせて開催できることが何よりも望まれます。一方で、感染や重度化リスクを考えれば、感染予防を第一に考える必要があり、状況に応じた休止等の対応も必要な判断です。

その時々の様々な状況において、カフェの運営者や参加者の方々が何を一番に望んでいるのか。場合によっては、今まで通りの形で開催を続けることが唯一の方法ではないかもしれません。

大切なのは、コロナ禍においても、これまで運営者や参加者の方々が築いてきた「つながり」を途切れさせず、何らかの形で「つながっている」という意識を持てることではないでしょうか。

現状では、対面での開催を継続するには、感染対策や様々な注意・工夫が必要になります。コロナ禍での試行錯誤や様々な工夫等は、コロナ以前から存在した課題を解決したり、運営者や参加者の方々にとって、より心地の良いカフェの実現につながるかもしれません。

以降のページでは、様々な工夫を行いながら継続している愛知県内の認知症カフェについて、その取組内容や運営者の方の声を紹介しています。これらの事例を通して、皆様が運営、支援、参加する認知症カフェにとって、今後の参考になるヒントが見つかれば幸いです。



取組事例 ～地域の多様な認知症カフェより～

コロナをきっかけに開催場所を変更 …… 7
すずしろカフェ（豊明市）

ビデオ通話と対面開催の使い分け …… 9
オレンジカフェ・クローバー（豊田市）

様々な認知症カフェのかたち　～カフェ運営の想い～ …… 11
認知症カフェなもなも（名古屋市）、アンキカフェ（豊橋市）、オレンジカフェしのおかむら（小牧市）

オンラインを活用したハイブリッド開催 …… 13
カフェくちなし（大府市）

コロナをきっかけに開催場所を変更

すずしろカフェ

豊明市

基本情報

開　　設	2015 年
運 営 者	豊明市南部地域包括支援センター
開催場所	地域の喫茶店・お寺
開催頻度	月 1 回程度

安定的な開催が難しい

すずしろカフェは、新型コロナウイルス感染症拡大以前は、地域包括支援センターの事務所がある特別養護老人ホーム内の多目的室を使用し、月に1回ほどの頻度で行われていました。毎回、参加人数が多くとても賑わう一方で、参加者数が会場のキャパシティを超えてしまうこともありました。また、施設が市の中心部から少し外れた場所にあり、酷暑のなかカフェに来るのが難しい参加者も多いため、8月は休止としたり、さらに、インフルエンザが猛威を振るう時期には、感染対策の面から施設内での開催が難しいといった状況もありました。

「場所を変える」という発想

新型コロナウイルス感染症の流行当初は、感染拡大防止を第一に考え、2020 年 2 月を最後に一旦カフェは休止になりました。その後も感染状況は日々変化し、施設内での再開のタイミングを見通すことは難しい状況が続きました。一方で、運営側には、このまま休止を続けていて良いのかという思いもあり、様々な検討をする中で、「場所を変えて開催する」というアイデアがあがりました。以前から、地域の身近な場所で単発の出張カフェを開催してみてはどうかという意見があり、これがヒントになったようです。

開催場所にかかわらず、適切な感染対策が必要となることはもちろんですが、地域での開催は施設内での開催と比べ、地理的にも参加者がアクセスしやすく、時期によらない安定的な開催ができるといった効果が期待されます。

コロナをきっかけとした既存課題の解決

従来からの課題
（施設での開催）

- キャパシティ
- 地理的な問題
- 感染症対策のハードル

コロナを
きっかけとした
試行錯誤

課題の解決
（地域での開催）

- 喫茶店とお寺に分散
- アクセスしやすい
- 適切な感染対策
- 誰もが参加しやすい雰囲気

地域の喫茶店とお寺で開催

その後、包括のスタッフとボランティアで協力しながら様々な関係者と調整を重ねた結果、地域の喫茶店とお寺から協力を得られることになりました。

喫茶店は国道に面しており、外の景色や歩く人の姿を眺めながらゆっくり落ち着いた雰囲気です。また、店内では自家製のパンも販売しており、買って帰ることを楽しみにされる方もいるとのこと。

お寺は訪れるだけで厳かな気持ちになり、四季の植物は皆の気持ちを和ませてくれます。広い観音堂があり、体操や講話などのプログラムを実施しています。

また、参加者の方からは、「気軽に参加しやすくなった。」といった声が聞かれています。

喫茶店やお寺はカフェの開催日以外にも訪れることができる場所であり、参加者の方の外出機会の拡大にもつながっています。

楽しみながら活動の幅を広げていきたい

すずしろカフェでは、安定的な継続や活動の幅を広げる観点から、今後はオンラインの活用等も計画しています。今後、感染症や災害などで皆が集まって開催することが難しい場合も、参加者の方とのつながりを維持できるような土台作りを進めていく予定です。また、例えば、愛知県認知症希望大使の方にオンラインで講話してもらうなど、オンライン活用の様々なアイデアを皆で話し合っているようです。運営者の浦野さんは、「すぐに上手くいくわけではありませんが、まずはスマホ教室を行いながら、長い目で楽しみながら進めていきたいと思っています。」と話しています。

運営者の声

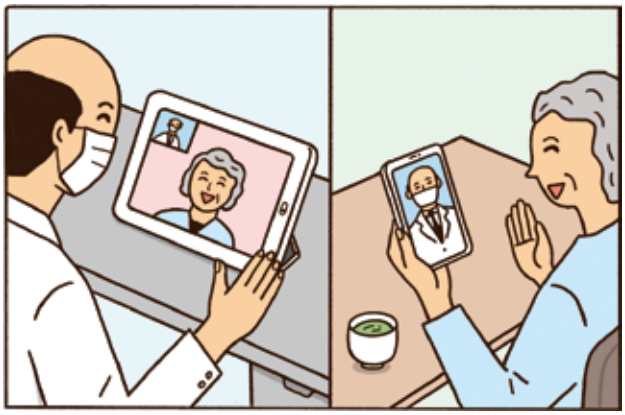
すずしろカフェでは、コロナを機に開催場所を地域に移しましたが、地域の理解、ボランティアの方々の協力、参加者の方々からの再開を望む声と、コロナ禍でカフェを継続していくことへの思いがつながったからこそ実現できたと感じています。

地域での開催は、参加者の方の普段の生活に溶け込みやすく、「パンを買いに行くついでや、お参りのついでに寄ってみませんか?」とカフェへのお誘いもしやすくなりました。また、地域での開催により、通りすがりの方やお店やお寺を訪れる方など、地域住民に認知症カフェを知っていただけるきっかけも広がったと実感しています。

コロナをきっかけに既存課題にも向き合うことで、これまで以上に良いカフェを目指すことができています。今後も参加者やスタッフの「やってみたいこと」を少しずつ実践していきたいと思います。

すずしろカフェ公式キャラクターの「すずちゃん」

ビデオ通話と対面開催の使い分け



オレンジカフェ・クローバー

豊田市

基本情報

開　　設	2016年
運 営 者	豊田地域ケア支援センター
開催場所	豊田市地域医療センター内の喫茶店、オンライン（LINE）
開催頻度	月1回程度

医師に気軽に相談できるカフェ

オレンジカフェ・クローバーは、認知症の人や家族、地域の高齢者が認知症への不安や負担を軽減することを目的として、地域医療センター内の喫茶店で開催されていました。カフェの特徴として、地域医療センターの医師が参加しており、参加者が日頃の悩みなどを気軽に医師に相談ができる点があげられます。

開催時は、医師やスタッフの講話に加え、参加者が協力して簡単なゲームを行うなど、参加者同士の交流につながるようなプログラムが実施されていました。また、誰もが気軽に参加できるように、スタッフはカフェエプロンや帽子を付けるなど、「喫茶店」としての雰囲気づくりを大事にして運営されてきました。

新型コロナウイルス感染症の拡大以降、開催場所が医療センター内ということもあり、感染リスクの面から、2020年3月に休止となりました。一方で、スタッフや参加者からは、コロナ禍においても参加者とのつながりが途切れてしまわないよう、定期的な開催を望む声が聞こえていました。

カフェのポスター

LINE を用いた「もしもしカフェ」

感染リスクを最小限にして継続する方法をスタッフで検討した結果、2020年6月からビデオ電話（LINE）を使って交流する「もしもしカフェ」を実施してみることになりました。もともと飲食提供にあたり把握していた連絡先を活かして、参加者と連絡できないかという発想から生まれたアイデアでした。

「もしもしカフェ」についても、これまでの対面開催と同じ曜日・時間で実施することにより、参加者の方も開催日を覚えやすいほか、継続的にカフェに参加している感覚がもてるといいます。

電話での会話では声の調子のみで表情は分からないので、よりお互いの様子が伝わるように、ビデオ通話を使用しています。運営者の高橋さんは、「電話でのやり取りはどうしても型どおりになりやすいですが、顔が見えるとリラックスした雰囲気で対話ができます。」と話します。現況を聞いたり相談を受けるなど、短時間のコミュニケーションですが、参加者からは「外出できず自宅で過ごす中でも、医師やスタッフに直接相談することができて安心」といった声もあり、「もしもしカフェ」が参加者の安心につながっていることが分かります。

コロナ禍の生活を振り返ろう

2020年6月以降は、「もしもしカフェ」を中心に開催しつつ、比較的感染が落ち着いている時期は、地域の喫茶店（ささえあい協力機関）にて対面で行うなど、状況に応じた形でのカフェが継続されています。

対面開催時にはプログラムの1つとして、コロナ禍の生活に関する簡単なアンケートを実施しています。アンケートの集計結果を発表しながら、参加者がお互いの努力を認め合い、それが参加者の自己肯定感の向上につながるようにスタッフが場を展開していきます。

参加者同士の会話を抑えつつも皆で場を共有したい、巣ごもり生活でストレスがたまる日々でも前向きになってもらいたいというスタッフの願いから生まれた取組です。

対面開催時のアンケート（一部を要約）

皆さん、こんにちは。ようこそ！
やっと！会えたねぇ～
今年、初カフェを開催できることになりました。
密・密・密を避けて考えに考えた結果です。
隣の人とアンケートをもとにご自身の１年を話題にしてみましょう。

Q私は前回から変わらず外出を控えていますか？
Q家の中でも運動を頑張りましたか？

2020年度の実施状況

2020年度　（月）	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
もしもしカフェ	×	×	○		○	○		○	○	○		
対面開催	×	×		○			○				○	○

運営者の声

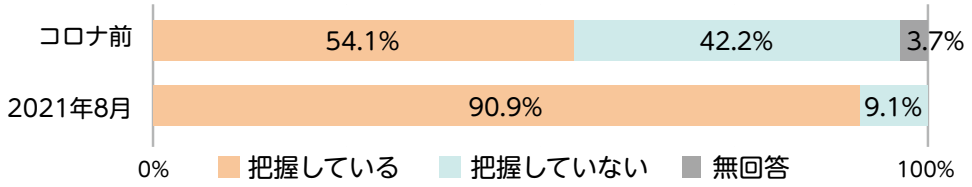
認知症カフェの役割は、人とのつながりを感じられることだと思います。そのため、コロナ禍でもスタッフや参加者がつながりを維持できるように、試行錯誤しながらできる限り継続したいと思います。

「もしもしカフェ」はあくまで補助的なもので、なるべく対面開催を行いたいと思いますが、今後も外出できない状況が生じたり、参加者から希望があれば、つながりを保つ手段として活用していきたいです。

カフェアンケートより

休止中の参加者への連絡

コロナ以前は、参加者の連絡先を把握しているカフェは半数ほどでしたが、調査時点（2021年8月）で開催しているカフェでは9割が連絡先を把握していました。オープンな開催等の観点から判断は分かれますが、休止期間中の様子確認や再開案内の連絡では役立ったという声も聞かれました。



※アンケート回答のあった認知症カフェ（n=327）
※「コロナ禍で休止したが現在は再開している」「コロナ禍でも継続開催」と回答したカフェ（n=99）

サンダル履きで行けるカフェを

認知症カフェなもなも

名古屋市北区

介護家族の経験からカフェを立ち上げ

認知症カフェなもなもは、認知症の家族の介護を行っていた駒田さんが始めたものです。誰もがふらっと立ち寄れる場にしたいとの思いから、お茶とお菓子を楽しみながら、ただおしゃべりするだけの「何もしないカフェ」として開催しています。ご自身が介護中に感じていた、認知症になっても「母は母」との思いをもとに、何が認知症の人にとって心地よいのか、常に試行錯誤しながら運営しています。

基本情報

開　　設	2019年
運 営 者	個人、住民ボランティア
開催場所	東志賀コミュニティセンター
開催頻度	月1回程度

コロナ禍だからこそ…

新型コロナウイルス感染拡大により2020年の春季はカフェを開催できない状況となりました。しかし、独居の方は寂しいだろうと思い、できることをやればいいとの考えから、屋外（公園）に折りたたみいすを持ち寄って、今までよりも短時間で、お話しをするところから再開しています。

駒田さんは、コロナ禍によって認知症カフェの役割を改めて考えることができてよかったと言います。コロナを機にコミュニティセンターや地域の役員さんとも連携するようになりました。身近な地域で「サンダルのまま行けるところでありたい。」、「今は困っていない人でもいつか困ったときに行ける場所でありたい。」との思いでカフェを続けています。

様々な認知症
～カフェ運

地域の力を集結させて

オレンジカフェしのおかむら

小牧市

地域住民と地域包括支援センターの二人三脚で

オレンジカフェしのおかむらは、地域住民が主体になって運営する認知症カフェです。もともとは認知症サポーターステップアップ講座の中で、当地域の参加者同士が地域課題を共有したことがきっかけとなり、参加者の「何か活動を起こそう」という思いと、地域包括支援センター（包括）の後押しによって開設に至りました。運営は民生委員、自治会役員をはじめ、地元住民ボランティアが中心となっており、参加者を担当するケアマネージャーや市役所職員等が参加することもしばしば。また、移動手段の確保を強化するため、NPO法人と連携した送迎支援も実施しています。まさにボランティアの力を集結したカフェで、「スタッフと参加者」ではなく、同じ地域に住む住民としての交流が生まれています。

基本情報

開　　設	2017年
運 営 者	住民ボランティア
開催場所	東部市民センター
開催頻度	月２回程度

運営は包括がサポートしており、当日は専門職として相談対応等を行っています。そのため、カフェに参加している時の様子やスタッフとのやり取りの中での気づきなどを、すぐに包括に共有することができ、必要に応じて適切な支援につなげられる仕組みができています。

地域のサードプレイスに

アンキカフェ

豊橋市

基本情報

開　　設	2021年
運 営 者	NPO法人ぽかぽかの森
開催場所	アンキカフェ
開催頻度	常設（木曜定休）

「ごちゃまぜ」から生まれるつながり

アンキカフェは、2021年6月にオープンした常設型のカフェです。コロナ禍で人と人のつながりが途切れつつある今だからこそ、地域に必要な場所であるとの思いから開設されました。認知症の人や家族をはじめ、地域の高齢者、子ども連れなど、多世代が安心して来られる場として運営しています。高齢者の方は地域の口コミで来店し、カフェでの会話を楽しみにしている人も多く、運営者の杉野さんやスタッフは、利用者同士の交流が生まれるよう、さりげない声掛けを心がけていると言います。

カフェのかたち
営の想い～

気軽に集まれる開かれた場所に

アンキカフェでは、ボランティアの方と様々なワークショップ等を開催したり、カフェを地域に開放し、講座やイベントなどが開催されています。また、認知症サポーター養成講座だけでなく、子どもや若い世代向けの企画も展開されています。こうした地域に開かれた運営により、開設して間もないものの、誰もが気軽に集まることのできる地域に開かれたサードプレイスになっています。

SNS による情報発信にも力を入れてます！

丁寧な運営の積み重ね

オレンジカフェしのおかむらでは、毎回、終了後にスタッフによる振り返りを実施しており、その議事録は開設当初のものも大切に保管されています。また、送迎時の車内の会話から参加者の本音を把握するなど、参加者の声を丁寧に拾い、運営に活かしています。

コロナにより休止した際には、スタッフが参加者の自宅を訪問し、生活の様子を気にかけながら、再開に向けての案内を行い、不在時にはポスティングも行いました。これまでに築かれたカフェと参加者とのつながりが、コロナ禍の生活の悩みや困りごとをいつでも相談できるといった安心にもつながっています。

誰もが「じぶんごと」

代表の佐藤さんは、「認知症は特別なことではなく、年齢に応じて生じる様々な変化と同じです。」と話します。「誰もが認知症になり得る」という認識を地域に浸透させていくこともカフェの役割と考え、皆で協力しながら、より良いカフェ運営を模索しています。

オンラインを活用したハイブリッド開催

カフェくちなし

大府市

基本情報

開　　設	2016 年
運 営 者	社会福祉法人仁至会（認知症介護研究・研修大府センター）
開催場所	大府センター内
開催頻度	月 1 回程度

再開方法を丁寧に検討

カフェくちなしは、社会福祉法人の地域貢献事業として、2016年に活動が始まりました。大府センターや法人内の介護老人保健施設のスタッフ、地域の多様なボランティアの方が参加し、認知症の人や家族を含め、地域の人々が交流できる場として運営されてきました。そうした中、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、感染予防のため2020年3月に活動は一旦休止となりました。

休止中は参加者の方の状況確認のため、スタッフが月1回程度、電話やメールでの連絡を取っていましたが、それまで特段の事情がない限り、参加者の連絡先は把握していなかったため、連絡できる方が限られていました。

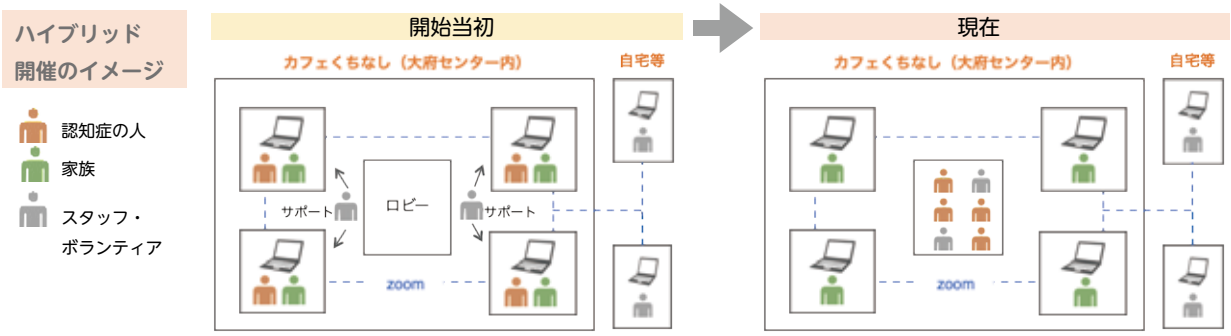
カフェ再開に向けては、これまでの参加者にカフェ参加についての意向を確認しつつ、スタッフ間で何ができるかの話し合いを重ねました。その結果、当時の感染状況等を踏まえ、従来どおりの対面開催は断念し、オンラインを活用したハイブリッド開催を試してみることになりました。

オンライン活用に向けた準備期間

2020年6月～9月は、オンラインを活用した開催に向けて、様々な準備を進めました。まずはスタッフが、他団体主催のオンライン交流会に参加し、オンライン開催の方法やイメージを把握しました。そのうえで行政担当者・認知症地域支援推進員と連携し、若年性認知症の人・家族を対象にオンラインの交流会を試行しました。その後、大府センターでZoomを契約。スタッフで使用方法を学習し、参加者に配布するマニュアルを作成しました。会場準備にあたっては、研修施設である大府センターの強みを活かし、参加者1組ごとに部屋とパソコンを用意することができました。

こうした準備を経て、10月に「第1回オンライン版カフェくちなし」を開催し、会場・オンライン合わせて23名の方が参加しました。

ハイブリッド開催時の案内チラシ



試行錯誤しながらより良い形に

コロナ禍でのハイブリッド開催では、開催時間の短縮や飲食提供の中止、事前申し込みによる参加人数把握といった感染対策に加え、ブレイクアウトルームを用いた少人数での交流など、オンラインならではの機能を活かした運営がされています。月替わりのイベントは、Zoomの画面共有機能を使用しながら、様々な講師から話題提供してもらい、バリエーションを増やして実施できるようになりました。

開始当初、会場では、認知症の人と家族1組ごとに1部屋・パソコン1台を使用していましたが、本人同士・家族同士で話したいというリクエストや、本人にとっては画面を通した会話はしにくいとの指摘もありました。そのため、家族同士は1人パソコン1台でのオンライン交流、本人同士は感染予防に配慮し、対面で交流を行う形に変更したところ、家族は日頃の思いや悩みなどを打ち明けやすくなり、本人はオンラインよりも会話や笑顔が増え、それぞれの交流が深まっています。

「つながり」の維持と新たな気づき

当初は、オンラインに苦手意識のある参加者もいたとのことですが、スタッフと一緒に試行錯誤しながら続けることで、徐々に使用できるようになっています。対面とは異なる部分も多いですが、お互いの顔を見ることで安心感が生まれ、結果として、「コロナ禍でも運営スタッフや参加者がこれまで築いてきた『つながり』を継続することができていることは非常に大きい。」と運営者の齊藤さんは話します。

また、骨折で会場に来られなかった参加者が、自宅からオンラインで参加できたこともあり、コロナ禍に限らず、体調や移動手段等により参加が難しい場合でもつながりを維持できるといった「新たな気づき」も得られたとのこと。参加者だけでなく、スタッフやボランティアも柔軟な参加が可能になっており、実際に新たなボランティアが仲間入りするなど、オンラインをきっかけに様々な出会いが生まれつつあります。

運営者の声

休止期間中は、参加者の方とスタッフの皆で「会いたい」「さみしい」という思いを共有しました。カフェくちなしは、関わってくれているすべての人にとって、「つながり」が生まれる大切な場であることを再認識しました。

当センターではハイブリッド開催をしましたが、無理にオンライン開催をする必要はなく、それぞれのカフェの状況や参加者のニーズに応じて、部分的に活用したり、他のカフェと協力するなど、柔軟に検討することが重要だと感じます。将来的には、コロナ禍での新たな気づきも活かしながら、活動の幅を広げていきたいと思います。

参考情報

▶コロナ禍における認知症カフェに関する実態調査（2021.12）

https://www.pref.aichi.jp/soshiki/chiikihoukatu/ninchisho-cafe-tyosa.html

愛知県内の市町村や認知症カフェを対象としたアンケート調査の結果です。本パンフレットで紹介した結果等についてより詳細に掲載されています。

▶外出自粛時の認知症カフェ継続に向けた手引き（2020 年度）

https://www.dcnet.gr.jp/support/cafe/index.php

外出や人と人との接触が制限されてしまうような状況下でも、認知症カフェを継続していくヒントをまとめたものです。（認知症介護研究・研修仙台センター）

▶認知症カフェ運営マニュアル・認知症カフェ利用案内（2018 年度）

https://www.pref.aichi.jp/soshiki/chiikihoukatu/ninchisho-cafe.html

認知症カフェの立ち上げ・運営方法をまとめた運営者向けマニュアルです。参加者の方向けには、愛知県内の認知症カフェの情報を掲載した利用案内があります。

▶あいちオレンジタウン構想 第２期アクションプラン（2020.12 策定）

https://www.pref.aichi.jp/soshiki/chiikihoukatu/aichiorangetown-2.html

「あいちオレンジタウン構想」にもとづく、2023 年度までの愛知県の認知症施策を掲載しています。

愛知県

2022 年３月

愛知県福祉局 高齢福祉課 地域包括ケア・認知症施策推進室
Tel：052-954-6310 Fax：052-954-6919